

2018 年度 春の大セミナー 5thD テーブル総評

Judge：河野（UT4）、清岡（早稲田4）

Table Member：内村（立教3）、西村（青学3）、布川（立教3）原（立教3）、古川（武蔵3）、堀本（慶應3）

構成： 1.議論の流れ 2.順位選定理由 3.コメント

1. 議論の流れ

文責：河野

まず、自分から議論の流れに関して説明します。あくまでジャッジからみた流れのため、テーブルメンバーの理解とのズレがある箇所があるかもしれませんがご容赦ください。また、総評ってことでかなりもろもろ省略して書いているので、もっと深く知りたかったらテーブルの人かジャッジに聞いてみてください。

➤ Narrow

西村と布川が OP として立候補した。両者ともに C/P を扱ったものであり、西村のコンパリアイデアが DATG を教師にしての、暴力を与える者より受ける者のほうが助けるべきという主張だった。対して布川は DATG を生徒にしたうえで、C/P (SQ で受ける) と Scold (APA で受ける) での S/M の大きさを「なぜ罰を受けるのかの理解」をもとにして C/P のほうが S/M が大きいと主張したものだ。

一通りの質問が終わった後 OP 投票がされ、2 対 2 で投票が分かれた。ここで堀本が「両者の S/M とコンパリアイデアを確認・比較したうえでもう一度投票しよう」と提案した。確認した結果西村のコンパリアイデアは布川への反論として使えると堀本が主張し、そこに流される形で OP は布川となった。

➤ ASQ

usual なオピシであったため、いわゆる定義への質問は少なかった。その中で、主に堀本が Q の形をとりながらコンパリアイデアへの反論となりうる論点を提示していった。

➤ PLAN

C/P のプラスとマイナスの側面があること・西村が OP として立候補したアイデアをコンパリアイデアで使う気があるのかを原が Q で確かめたのちに、原が「テーブルでの direction を決めるためにプラスとマイナスの大きさを今比較しよう」という S を打つ。西村・堀本・内村による介入で原の S の内容を確認したあと堀本が talk later の S を打つが、テーブルでは話しきることができずに場が停滞しかける。その中で西村が「コンパリアイデアで DATG が教師になれば西村のコンパリアイデアを、

生徒になれば布川のコンパリを使おう」という S を打ってテーブルがうなずき、議論は終わる。だが、その結論を堀本が最後に C した際、その C は西村の上述の S とは異なっていたがテーブルはその C にも納得する。原の議論自体は終わったが、西村の S 自体も堀本の C から考えて浸透していなかったと判断した。

その後は特に何の話もなくスムーズに AD を取り、PLAN side は終わった。

➤ コンパリ

DATG は生徒になり、「C/P のほうが Scold より罰を受ける理由を理解できないため S/M は大きい」という布川のアイデアの検証から始まる。内村・堀本の介入の中で堀本が t/point を引き、更に堀本が「SQ だと C/P+Scold の 2 つの方法で生徒に罰の理由を理解させられるから、SQ>APA」の逆ロジックを提示する。さらに堀本は「①布川のロジック検証②堀本のロジック検証③どちらのロジックが強いのか」の順番で話すことを提案し、受け入れられた。

布川のアイデアはスムーズに通り、堀本が「罰を受ける理由を理解させる数」に着目した SQ>APA ロジックを提示する。内村・布川の介入を経て堀本は t/point (①罰の数の確認②C/P で生徒は罰の理由を理解するか③Scold ではどうか④CCL) を提示し、それに沿った QC を経て特段反論もなく堀本のロジックは成立した。

その後布川は堀本よりも自分のロジックが強いことを提示するために「C/P (SQ) よりも Scold (APA) のほうが direct に罰の理由を理解させるから SQ<APA」というロジックを提示するが、内村から①SQ でも Scold で direct に理解させられる②教師も罰の理由理解させるよう努力するから関係ない、の 2 つの反論が提示され、堀本・西村の介入を通じて内村の反論は成立した。ここで、布川のオリジナルロジックに端を発する議論は収束し、布川はまた新しい AD>DA ロジックを提示することになった。

布川は新ロジックとして、「C/P (=SQ) に比べ Scold (=APA) は罰の理由が reasonable であり、reasonable な罰のほうがその後生徒は能力を上げようとする。ゆえに AD>DA」というロジックを出す。内村・堀本・西村の介入によりロジックでの定義等を確認・布川のロジックを意見を浸透させた後、西村・内村・堀本らが反論をしているところで議論は終了した。

➤ 議論へのコメント

テーブルの細かいところに関して思ったことが 2 つあったので書いてきます。まず原の S に対しての堀本・西村の S のあたりです。堀本の talk later の S は妥当でしたし、ある種その S が議論を終える発端であったと感じます。ですが、最終的には西村の S によって議論は終わり、しかしその S 自体も堀本の C とその C へのテーブルの反応を見る限り浸透していないように感じました。上のテーブルであるほど多くの S は発生すると思います。ですが、議論を終えた S はどんな S であったか・そしてその結果このテーブルにはどこまでの結論が得られたのかは、きちんとテーブルでの理解を合わせておかないと後々無駄なごちゃりの原因になると思うので考えてください。しょぼいロジックへの talk later 程度なら理解の齟齬は生まれないと思いま

すが、結論が少し特殊だったりいろんなSが出てた時は特に注意してもらいたいです。

2つ目は、コンパリでの堀本の逆ロジックが成立したところです。堀本はアイデアプレゼンターでありながら自分で t/point を引いており、ジャッジ目線で言えばその t/point には論点が抜けていると感じました（「理解させる罰の数が多いからといって、数が多い分単純な足し算の結果として罰の理由への理解度は上がるかどうか」みたいな）。この新たな t/point がクリティカルかどうかは実際にディスしないとわかりませんが僕はクリティカルと思っており、このように堀本によって勝手にひかれた t/point に対して doubt なり改変なりしようとした人がいないのは気になりました。アイデア出す人が引く t/point なんて所詮は自分有利になるように引いているものだと思うので、出された t/point をもっと疑ってかかるのは大事ななって思いました。

3.個人総評

文責：清岡

➤ 個人順位

1. 堀本(慶應 3)
2. 布川(立教 3)
3. 内村(立教 3)
4. 西村(青学 3)
5. 原(立教 3)
6. 古川(武蔵 3)

➤ 選定理由

1 位 堀本(慶應 3)

序盤からテーブルメンバーの理解統一やプロシーディングを担うことにより、常に議論の中心として存在感を出していた。特に、**comparison** においてプロシーディングを行いつつロジックを通していたことが高く評価され、二位との差異に繋がったと考えられる。また、**5thD** テーブルまで勝ち残ってきたメンバーの中であれほどの圧倒的な発言力を持っていたことは素晴らしいと思った。テーブル上で議事進行とアイディア提示の両方を担っていたことを高く評価したうえで、一つ残念だった点をあげるとすれば、**comparison** において提示していた **procedure** や **idea** があまり新鮮味のないものだったことである。彼の実力から考えれば **comparison** においてもっと新しい議論を生み出すこともできたと思うので、アッセンでは更に面白い議論へと導いてくれることを期待している。

2 位 布川(立教 3)

オピニオンプレゼンターとして前半の議論の土台をつくったことと、**comparison** においてロジックをいくつか提示し立証していたことが評価された。**comparison** において、堀本のプロシ

ーディングに合わせて柔軟に対応しロジックの提示や質問を行っていたことも良いと思う。しかし、ロジック提示者であるにも関わらずプロシーディングや理解の統一が他のテーブルメンバーにより行われていたことが残念であり、もしも最後まで自らの力で議事進行と立証ができていたらなおよかった。

3 位 内村(立教 3)

色々なダウトを提示し、議論の流れを変えていたことを高く評価した。一方的に意見を押し付けるのではなく、テーブルの理解統一を促しながらテーブルメンバーの敵にならずに意見を出し続けていたところが上手だと感じた。また、提示されたダウト自体も納得のいくものであり、冷静にまともな意見を提示し続けていたことが良い。ただ一つ気になったのは、押しが弱く、良いことを言っているのに何度かスルーされそうになっていたことである。今回は穏やかなテーブルだったから意見を無視されずに済んでいたが、もっと議論が白熱した場合にどうなってしまうか少し不安が残るので、そのような場で自分の意見を取り扱ってもらうにはどうしたらよいか、について工夫をしていくとよいと思う。

4 位 西村(青学 3)

理解の統一を促す介入やダウトの提示が見られたが、3 位の内村に比べて介入量がかなり少なかったためこの順位となった。議論の後半では彼の介入により議論が整理されていることも見受けられたが、上位テーブルにおいては **confirmation** を必要とする場面が絞られてくるためか西村が得意とする質の高いトリートがあまり見られず、そのあとの **idea** や **suggestion** にうまく繋がらなかったことが残念だった。アッセンブリーでは、**confirmation** が必要となったときにもっと素早く入り、そのあとのプロシーディングやアイディア提示に繋げて、彼が本来持っている技術を最大限に生かしてほしいと思う。

5 位 原(立教 3)

前半の議論においてオピニオンプレゼンターの意見を引き出していたことと、**suggestion** という形で意見提示していたことを評価した。ただし、議論の後半においてはほとんど介入が見られず、4 位以上との差が開いてしまった。5thD テーブルにおいては、原が本来持っている力をほとんど発揮できていないように見えてとても残念だったので、アッセンブリーにおいてはもっと場慣れして鋭い発言をたくさんしてくれることを期待している。

6 位 古川(武蔵 3)

介入が限定的であったためこの順位となった。前半の議論において一度意見を提示していたものの、説明するだけにとどまり議論の流れを変えられなかったことが残念だった。アイディア自体は納得のいくものだと思ったので、その場で自分のアイディアを話させるくらいの勢いでやっていけば、上位テーブルでももっと議論の中心に入っていけると思った。

3.コメント

河野：皆さんお疲れさまでした。3時間のテーブルを通してコンテンツでの戦いが白熱しており、いわゆる「議論」というものを春セミ期間で一番見れた気がしました。タスクを中心にしたトリートが多く、コンテンツを深ぼっての話が少ない印象の代だからこそ、コンテンツを使っのアイデア勝負ができることはアッセンに向けての大きな武器になると思います。アッセン甲テーブルで上位もしくはファイナリストになるためにも、あと2か月とちょっと頑張ってください！

清岡：最後に、議論全体に関して、個人的に良かったと思う点と改善点をあげておきます。

<良かった点>

1. お互いの話をちゃんと聞きあい、言いたいことを言いあえていたこと

遮りがなかったとは言えないけれど、発言するときに「あなたの話もちゃんと聞いているよ」感を出すのがうまかったと思いました。そのおかげもあって、特定のメンバーだけが話すのではなく多くのテーブルメンバーが発言できていた点も良かったです。

2. 常に新しいアイデアが出ていたこと

argument や doubt、suggestion などのアイデアがたくさん提示されていて良かったです。当たり前のことなので改めて指摘するほどのことでもないですが、議論においては何かしらの意見がたくさん出た方が断然楽しいです。だから、これからも意見がたくさん出るテーブルが増えてほしいと思います。あと、意見というと argument や doubt を想像してしまう人が多そうですが、suggestion も意見だということも忘れないでください。アッセンブリーでも今回のような楽しいディスカッションをしてくれることを期待しています。

<改善点>

1. 理解が統一されていないときがあったこと

アトモスが良すぎたせいもあってか、お互いの発言内容をすぐに認めてしまっていて、理解がずれたままロジックがたったり suggestion が通ったりしている様子が見受けられました。今回のディスではボロが出ていなかったけれど、違和感を抱きながら議論している人も多かったと思うので、周りの空気を読むのも大事ですが、もう少し丁寧に議論できるとさらに良いと思います。

2. 意外と議論が深まっていないこと

アイデアがたくさん出ていたので普段のディスカッションよりは議論が深まっていたように見えたのですが、うまくごまかされている論点も多いように感じました。他の人が言っていることに賛同する姿勢はとてもよかったのですが、本当に何もツッコミどころがないかどうかについては一度よく考えてみると思います。元々たくさん介入している人はもちろんのこと、介入量を維持できなかった人はそういうことを意識すればもっと介入するチャンスを作るし、議論も盛り上がると思います。